

稲葉 本日は、朝早くから長時間シンポジウムにご参加いただきありがとうございました。プロジェクトの最終年度ということで、最後に2点だけコメントをさせていただいて、挨拶に代えさせていただければと思います。



先ほどのパネルでも申し上げましたが、「<学=実>連携」が本当にできるのかということはずっと考えてきた中で、今日のシンポジウムの報告会を拝聴して、私自身もすごく勉強になった部分があります。私は2013年にこのプロジェクトが始まってから人間科学研究所の活動に参加したので、まだ3年ほどしか経っていません。さらに私のバックグラウンドは工学系、コンピューターサイエンスでして、全然人文社系ではないんです。そういう立場から今日の報告会を拝聴して、人文社系の先生方が、学問の領域を超えて社会問題に取り組み、学融的なアプローチによって、イシュー・オリエンテッドで問題を解決している、社会に貢献している、さらにサイエンティスト&プラクティショナーを育てているということを見させていただきました。最近、文部科学省が「人文社系は不要」とも受け取れることを言っているという話を新聞で見ましたが、元理系の身としては、本日の企画を受けて、逆に人文社系こそ必要なんじゃないか、という気がしました。人文社系が社会に貢献する、あるいは人を育てるという新しいモデルを、本プロジェクトの代表である私自身が勉強させていただいた気がしております。それが申し上げたかった一点目です。

もう一点は、我々のプロジェクトのもう一つのテーマである「インクルーシブ社会」ということについてです。私自身は、社会全体がインクルーシブになるにはどうしたらいいのかということについてまだよくわかっていません。ただ、そのヒントになるかもしれない話として、私が関わっている、冤罪被害者を助けるための「イノセンス・プロジェクト」の話題を紹介します。このプロジェクトを始めるにあたって、先日東京であるシンポジウムを行いました。ここでは、弁護士や冤罪被害者登壇していただきました。一般市民の方もたくさん来られていて、手を挙げて多くのコメントや質問をいただきました。そして

シンポジウムが終わったあと、一般市民の方から、「何か手伝えることがあったらなんでも言ってください」と言われたり、別の方から「寄付の口座はありませんか」といきなり聞かれたりして、驚きました。もしかしたらこのあたりに、社会全体としてインクルーシブな思想をつくっていくヒントがあるのかもしれないと思いました。といいますのは、このプロジェクトは、「<学=実>連携」、つまり研究者と実務家が連携して冤罪被害の救済に取り組むためにプロジェクトです。しかし、そのような「<学=実>連携」がきっかけになるとしても、本当に社会が変わるためには、やはり「市民の力」が必要なのだろうという気がしました。

このプロジェクトは今年度で終わりますが、次年度以降、「学・実」に加えて市民の力を活かし、「学・実・民」連環プロジェクトを起こすことで、本当の意味で社会全体を巻き込んだインクルーシブネス、つまり包摂型の社会を考えていくようなプロジェクトにつなげていきたいと考えております。今日来られている方は、<学>の方、<実>の方、<民>の方もいらっしゃると思いますが、今申し上げた方向で頑張っていきたいと考えておりますので、是非ともさまざまなご支援、ご指導、ご鞭撻をお願いできればと思います。

今日は長時間ご参加いただき、また議論にも活発にご参加いただきまして、まことにありがとうございます。今後共よろしく願いいたします。どうもありがとうございました。



閉会後に撮影された集合写真。(敬称略)

後列左から：小泉義之、谷晋二、中村正、土田宣明、安田裕子、若林宏輔  
前列左から：サトウタツヤ、松原洋子、稲葉光行、河合克義、泉紳一郎、山本淳一

